

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員 (主査) 新井 政美



学位申請者 幸加木 文

論文名 現代トルコにおけるフェトウッラー・ギュレンの思想および運動の
志向性とその変容

【審査の結果】

本論文は、イスラム的理念を掲げた言論活動で現代トルコ社会に大きな影響力を与え続けているフェトウッラー・ギュレンの思想、および彼のはじめた運動が、1980年の軍事クーデタと1997年の「ソフト・クーデタ」とを経て、2000年代にいかなる展開をとげたかを明らかにし、さらには2010年代以降の展望をも示そうとするものである。ギュレンとその運動については、それがトルコ共和国の国是である「世俗主義」の解釈に深く関わる存在であるため、これまでもトルコ国内外で、好意的、否定的ふたつの立場からさまざまに論じられてきたが、それらの多くは、論じる以前からすでに結論が決まっている趣を否定できなかった。そうした状況の中で、本論文は先行研究を慎重に博搜し、検討に値する論点として、以下のふたつを取り出した。すなわち、ギュレンとその運動とがイスラムとナショナリズムとをいかに調整しようとしているか、および彼らがイスラムと民主主義との関係をどのように捉えているか、である。これらはいずれも、現代トルコにおけるイスラム運動を理解する上で決定的に重要な論点であると思われるが、従来の研究は、ギュレンがアメリカへ事実上の亡命を余儀なくされる1999年以降の言説や運動を分析する際にも、おもに亡命以前の資料を用いるという大きな問題点をかかえていた。本論文は、2000年以降のギュレンの発言に加え、彼の意向を代弁していると判断しうる運動幹部のそれ、さらには運動が主催し、多くの知識人、政治家が加わって議論を繰り広げている会議の最終報告書等を主要資料として分析を行ない、ギュレンとその運動とを歴史的、社会的に位置づけることに成功した。以上のことから明らかなように、本論文は、先行研究の批判的継承にもとづく問題設定の確かさと、議論を支える資料の妥当性、及びその読解の正確さ、結論の妥当性等において、課程博士としての水準に達していると判断される。よって、審査委員会は、論文審査、及び最終試験の結果に基づき、全員一致で、申請者に対して博士(学術)の学位を授与するのがふさわしいとの結論に達した。なお審査委員会は新井政美(主査)、飯塚正人、林佳世子、八尾師誠、八木久美子の5名によって構成された。

【論文の概要】

以下、目次を示した後に、章を追って概要を述べることとする。

序 章

第1章 トルコにおける世俗主義とイスラーム

第2章 フェトウッラー・ギュレンの思想と運動

第3章 2000年代のギュレン運動の言論活動

終 章 2010年代以降の状況

序章では、まずトルコ共和国建国に際して西欧的近代国家建設がめざされたこと、支配エリートによってイスラムが後進性の象徴とみなされたことが確認され、ついで、そうした共和国のあり方が、近代主義的な歴史研究と極めて高い親和性を持ったため、研究史においても長い間、イスラム的価値を重視しようとする知識人とその運動とが看過され、その意義が評価されずに来たことが確認される。さらに、2000年前後から「イスラム政党」がトルコ政治の中心的アクターになったこともあり、本論文の主題であるギュレンとその運動とが取り上げられる際も、もっぱら「イスラムの政治化」という問題意識から論じられることが指摘される。こうした、乗り越えられるべき課題を明らかにしたのち、ギュレンとその運動との概観がなされ、研究史上の重要な視角として、第一にイスラム的運動とトルコ・ナショナリズムとの関係、第二にイスラムと民主主義との関係が提示され、主要な先行研究が紹介される。そして、それら先行研究の依拠する資料が、ギュレン自身の発言をはじめ、彼の周囲で展開される運動を分析するための資料も含めて、もっぱら2000年代以前のものであるという問題点が指摘される。ついで、本論文における「世俗派」等の用語の定義、用いる資料に関する解説を行なって、この章を終える。

第1章では、まずトルコ共和国成立以後における政治とイスラムとの関係が、現代にいたるまで概観される。そして、イスラムの政治への影響を排するだけではなく、社会におけるその影響力も極力抑え、さらには国家が宗教を管理・統制しようとする特徴をもつ「世俗主義」原則を、「世俗派」がほとんど絶対視するのに対し、「イスラム派」がしだいに「世俗主義」の解釈を問題化しようとしてきたと論じる。同時に、とくに2000年代に入って、公的領域におけるイスラム的表象の可視化を容認する雰囲気広がったが、そのような変化を醸成する媒体となったのが、教育事業等の幅広い社会活動を展開したギュレンの運動であったと述べる。ついで、特殊トルコ的な「世俗主義」のさまざまな解釈のありようについてまとめ、現在においては、そうした解釈よりも、「世俗主義の民主性」に議論の中心が移っていることが確認される。

こうして「世俗主義」について概観がなされたのち、第2章ではトルコにおけるイスラ

ムのあり方が、オスマン帝国末期をも視野に入れた枠組みの中で論じられ、その流れの中にギュレンとその運動とが位置づけられる。20世紀初頭から1960年まで活動して多くの著作を残し、ギュレンも含む多数の信奉者、追隨者を有するサイド・ヌルスィーがまず取り上げられ、その生涯と影響とが瞥見される。「イスラム主義者」の典型のように見なされることの多いヌルスィーが、暴力的手段を否定し、秩序の維持を重視していたという重要な指摘もなされた。そして、秩序の維持を保障するものとして「国家」の存在を重視するという特徴をもつのも、トルコにおけるイスラムのあり方を特徴づけることが示される。これらは、従来あまり論じられることがなかった重要な点である。ついで、1969年にイスタンブール大学文学部の教員を中心とするナショナリスト知識人たちによって設立された団体「知識人の炉辺」と、彼らによって主唱された「トルコ―イスラム総合論」とが論じられる。アナトリアの征服とイスラム化とに果たしたスーフィー教団の役割が強調されたことの紹介など、トルコのイスラムのあり方に関する重要な指摘もなされる。そして、こうした先達たちの影響を受けながら、とくに1990年代以降、トルコ・ナショナリズムの様相を強めたギュレンの思想が取り上げられ、さらにこうしたギュレンの傾向に対する「イスラムの普遍性」の立場からする批判も紹介される。

第2節では、教育活動、メディアでの活動を中心に、ギュレン運動の具体的な姿が描かれ、とくに2000年代以降、トルコという国境を越えたグローバルな、あるいは「普遍的な」活動へと運動が志向性を変化させていったという重要な指摘がなされる。さらに第3節で、ギュレン自身の思想が、とくにイスラムと民主主義、イスラムと政治、宗教と科学、スカーフ問題などに焦点を当てつつ明らかにされる。そして、この時期には国家の秩序を重視する従来の姿勢から、個人の自由と民主主義とを重視する方向への転換がなされたことも指摘される。第4節ではギュレン運動の、とくに2000年代以降の政治的関与について述べられる。ギュレンとその運動とは、政治とは距離をおく姿勢を貫いてきたため、この問題を明らかにするのはたやすいことではないが、幸加木氏は、ギュレン運動の幹部がアメリカの有力シンクタンクの招きに応じて行なった講演などを主要な典拠として、この問題の解明に努め、一定の成果を上げている。

第3章は、2000年代以降のギュレン運動の志向性を明らかにする、本論文の中核的部分である。分析の対象となっているのは、ギュレン運動の広報活動を実質的に担う「ジャーナリスト・作家財団」が主催して開かれている「アバント・プラットフォーム」と呼ばれる会議である。1998年以降、毎年1～2回開かれているこの会議には、2002年から現在に至るまで単独で政権を担うことになる「親イスラム政党」(公正発展党)の要人も参加している。本章では、それらの会議の最終日に採択された提言が逐一紹介され、分析が行なわ

れた。「アバント・プラットフォーム」では、現代トルコの極めて重要かつデリケートな問題が躊躇なく議題として取り上げられ、まさにそれゆえに司法や軍などを含めた「世俗派」からはさまざまな批判も浴びたが、会議の最終提言のいくつかは、その後じっさいに政策として具体化されており、その意味で非常に重要な会議と見なすことができる。本章では、27回にわたる会議の中から、世俗主義、宗教・国家・社会の関係、民主主義と軍、クルド問題などを重点的にとりあげて、これら現代トルコの枢要な問題について、この会議がどのような提言を行なっているかを明らかにし、さらにそうした提言を、ギュレンおよびギュレン運動の発展の中に位置づけようとした。そして、会議の開始から14年、公正発展党政権10年目に当たる2012年に、軍政下の1982年に制定された憲法の廃止と新たな憲法の草案に関する提言がなされたことを、非民主的手段による政治への介入を排して民主的な価値に立脚したトルコを建設しようとするギュレン運動の強い意志の表明と評価し、また現実のトルコがその方向に近づいているのではないかと述べている。それはまた、トルコ・ナショナリズムの性格の強い運動として出発したギュレンの運動が、民主主義という、より普遍的価値に重点を移してきたことの表われと見なすこともできると述べている。と同時に、幸加木氏は、民主化を妨げてきた権威主義的体制を批判してきたアバント会議、およびギュレン運動そのものが、しだいに権威と化しつつあることをも指摘し、その弊害とも言える事態が出現しつつあるとも述べて、本論文とギュレン運動との「距離」も示される。

終章においては、2010年代以降の動向が、「世俗主義」解釈、および軍部との関係を中心に概観され、長年にわたってギュレン運動を、むしろ好意的に分析してきたアメリカ在住のトルコ人政治学者が、自らが権威となった運動が、むしろ民主化を阻害しかねないと述べていることを紹介して論を閉じている。

【論文の評価と審査の概要】

トルコ共和国建国の父であり初代大統領であったケマル・アタテュルクは、イスラムを後進性の象徴と見なし、したがってイスラムと、これを統治の原理としていたオスマン帝国との残滓をすべて振り払い、人類の進歩の先端にある（と彼が考えた）西洋の、完全な一員となるべく諸改革を実施した。こうした改革は、学問のレベルでは近代主義的歴史研究において肯定的評価を受けたが、政治的にも欧米諸国に好意的に受け入れられ、トルコは第二次大戦後の冷戦構造の中で、西側の重要な成員として着実な発展を示していった。だが反面、19世紀以来のイスラム改革の伝統は断ち切られ、イスラムに関わる主張は——たとえそれが「近代化」と矛盾しないものであっても——「反動」として切り捨てられる

ことになり、また人々の信仰心も行き場を失うことになった。第二次大戦後、複数政党制に移行したことを大きな契機として、イスラムがしだいに公的な場において可視化される傾向が現われたが、しかし「世俗主義」を国是とする環境のもと、イスラム的価値を重視する人々は常に「反動」と見なされ、また自らをもそうした立場におくような言動が常態化した。

そうした中で1960年代の末から国家（宗務庁）所属の説教師として活動をはじめ、多くの信奉者を集めて社会的にも大きな影響力を行使するようになったフェトゥッラー・ギュレンとその運動とに関して、おそらく日本で最初に書かれた博士論文が本論文である。現在進行中の運動であり、信仰と政治という、きわめて微妙な問題に直接関わるため、扱いにくいテーマであるが、これにあえて正面から挑んだ意欲と、困難な研究を完成させた意志と努力とに、まず審査委員全員から賛辞が送られた。こうした性格のテーマであるため、トルコ本国においてあえてこのテーマを取り上げようとする研究者は、あらかじめ運動を批判するか擁護するか、立場がはっきりしていることが多い。またトルコ国外において、政治学、社会学等の立場からこの運動を分析した（多くはトルコ人研究者による）研究も、典拠とする資料の多くが2000年以前のものに限られているという問題も存在していた。すなわち、ギュレンとその運動とが、トルコの政治、社会の主流に転換して以降は、そうした社会科学的分析が途絶えている観がある。そうした中で本論文は、「トルコ的なイスラムのあり方」と、「イスラムと民主主義」という二つの観点を掲げることで、その存在は誰もが知っているが、本当のところは誰も知らないように思われるギュレンとその運動とに、可能な限り公平で中立的な光を当てようとした。

資料としても、ギュレン自身へのインタビュー記事や時事的問題へのギュレンのコメント等を丹念に拾い集め、さらにギュレンに代わって運動の立場を外部に説明する性格をもつ講演資料を用いるなど、妥当なものであり、そうした資料に基づいた立論は、本論文の信頼性を高めていると言うことができる。さらに、ギュレン運動の広報活動を担う団体が1998年にはじめ、現在にまで継続している「アバント・プラットフォーム」と称される会議の提言を網羅的に精査し、この提言と、その後政権を担当することになる公正発展党の政策との関連性について指摘しているのも、本論文の重要な収穫である。ただ、惜しむらくは本論文にもいくつかの瑕瑾が存在する。公開審査の際に指摘された問題点は、概ね以下のようにまとめることができる。

まず、現代トルコに関心を持つものなら、いわば誰でも聞いたことのある人物と運動とを扱うという論文の性格から、説明の必要な事柄と不要なものとの判断が難しいという問題が生じた。このため、ギュレンとその運動とに関する全般的な解説が、必ずしも過不足

なくなされたとは言えない恨みがある。

ついで、第3章で取り上げた「アバント・プラットフォーム」は、本論文の最も重要な貢献であるが、幸加木氏は、これを淡々と紹介・分析している風であって、この分析のもつ意義が、十分に読者に伝わらないことが危惧される。これまでの研究でこれが取り上げられてこなかったことも含め、その意義を明確化するための、論文構成上の工夫がほしかった。さらに言えば、この会議の最終提言と、その後の具体的な政策との関連性について、もう一步踏み込んだ分析と指摘があればなおよかった。

また、「世俗化」、「世俗主義」、「イスラム派」、「イスラム主義」等の、混乱を招きやすい概念については、その定義や使い方に注意が払われており、その点は評価できるが、トルコのイスラム運動の特色としてあげられた「国家主義的傾向」や、ギュレン運動を指して使われる「市民社会運動」といった術語の意味するところが必ずしも明確ではなく、読者に余分な思考と判断とを強いている。

さらにこれに関連して、ギュレン運動について述べる際に頻繁に使われる「敬虔な」という形容詞や、「寛容」という言葉は、それぞれ特定のトルコ語の訳語ではあるものの、それらの単語がトルコ語の中で持つニュアンスと日本語におけるそれとの間に差異があることに、いま少し自覚的であるべきだった。せつかく客観的・中立的な研究を目指し、それに成功しているだけに惜しまれるところであった。

しかし幸加木氏は、これらに関連する質問に、いずれも明快な回答をし、結果としてこれらの問題点について、幸加木氏が自覚的であったり、あるいは十分な知識を備えていることが明らかとなった。またこれらの瑕疵が、本論文の価値自体を傷つけるようなものではないことも明らかである。

以上述べたように、本論文は、イスラム的理念を掲げた言論活動で現代トルコ社会に大きな影響力を与え続けているフェトウッラー・ギュレンおよび彼のはじめた運動が、とくに2000年代にいたってどのような展開をとげたかを明らかにし、その上でさらに2010年代以降の展望をも示そうとした意欲作である。若干の瑕疵はあるものの、それらは本論文の価値そのものを損なうものではない。また公開審査においても、幸加木氏は質問に対して的確に回答し、また指摘された課題に関しても自覚していることが確認された。

以上により、審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるとの結論に達した。